

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭

第17号 #
南九州城郭談話会報 #
平成13(2001)年5月25日発行 #
#####

鹿児島神宮社家屋敷跡の調査

— 桑幡家・留守家屋敷跡 —

重久淳一

1 はじめに

鹿児島県始良郡隼人町に鹿児島神宮がある。馬がお囃子に合わせてマンボを踊る、初午祭で知られている。1197年の建久凶田帳によると、大隅国一宮である鹿児島神宮の社領は、大隅国を中心に2,500余町歩に及ぶ。正八幡宮と呼ばれた鹿児島神宮の神威には盛大なものがあつた。桑幡・留守・沢・最勝寺家の4家が、この鹿児島神宮の社家として、長く世襲で携わってきた。隼人町では、平成12年度に、このうちの桑幡・留守氏の屋敷跡を発掘調査する機会があつた。調査の結果、多数の遺構・遺物が検出され、堀及び土塁を伴う中世居館ということが判明した。ここでは、この調査の概要について述べる。

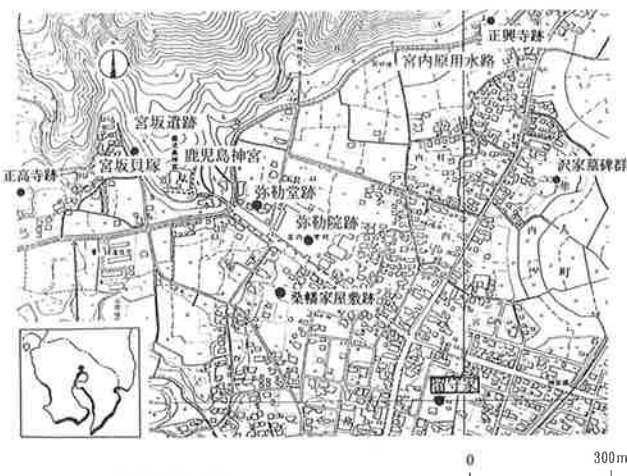


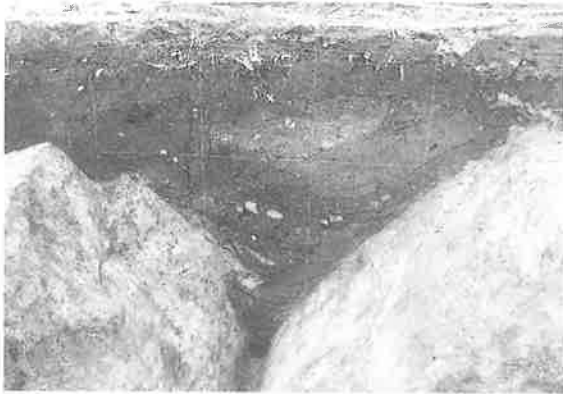
図1 遺跡周辺図

2 歴史的環境

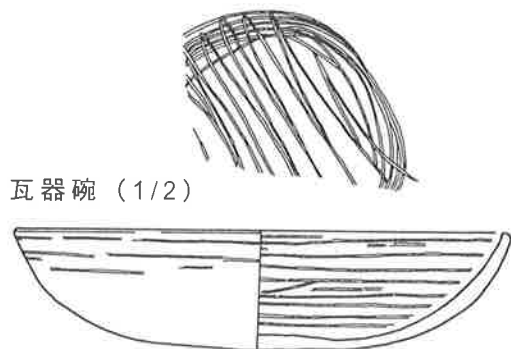
遺跡は、鹿児島県始良郡隼人町神宮2丁目及び6丁目に所在する。鹿児島神宮の参道がほぼ東西方向に真っ直ぐ延びており、それを挟んで北側に現在宮内小学校となっている弥勒院跡があり、南側に桑幡家屋敷跡が立地する。出入口近くには、現在でも土塁の高まりを残す。神宮から東約600mには辻の角と呼ばれる交差点がある。この交差点の南東には留守家屋敷跡、北東には沢家墓碑群などがある。鹿児島神宮の位置する台地は標高約30mで、そこから一段下がった両遺跡の立地する台地は標高約13~15mで、縄文海進以後隆起したといわれている。宮内小学校は明治2年の廃仏毀釈で消滅するまで、ここに鹿児島神宮の別当寺である弥勒院があつた。弥勒院跡では平成6~8年度の三次に亘る発掘調査で、中国製の青磁・白磁、タイ産の壺、出土例が極めて少ない元代の飛青磁、大量のカワラケ小皿などが出土している。沢家墓碑群には、現在、45基の板碑と延応元(1239)年の石塔、嘉禎3(1237)年の自然石塔婆が残っており、町の指定史跡となっている。

本遺跡周辺は、中世に栄華を極めた鹿児島神宮を取りまくように、四社家の屋敷跡・寺院跡(弥勒院・弥勒堂・正興寺・正高寺・正国

寺)があり、長く政治的・文化的・宗教的中心地として、「求心力をもつ空間」であった。また、発掘調査で出土した数多くの貿易陶磁器、さらに鹿児島神宮に伝世している品々は、海外との活発な交流を物語っている。いわば「貿易陶磁の終着点」と呼べる場所であった。



桑幡家堀跡

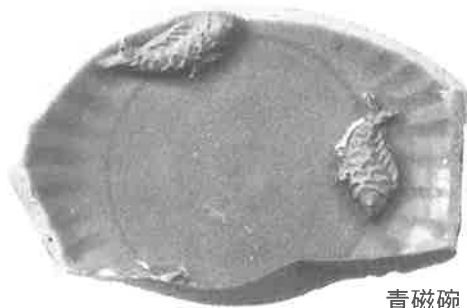


瓦器碗 (1/2)



青麗青磁

マルタバン壺



青磁碗

3 桑幡家屋敷跡の調査

宅地造成工事に伴って、平成12年7～8月、隼人町遺跡調査会によって調査された。開発面積約2,900㎡のうち、わずか約300㎡が調査されにすぎないが、多大な成果があった。屋敷跡を取り囲む薬研堀の溝、池の跡などが検出され、弥勒院跡と同じように多量の貿易陶磁器が出土している。中でもマルタバンの壺といわれる中国南部～東南アジアの焼き物やベトナムの陶器、高麗青磁などは注目される。他には、12世紀後半の楠葉型瓦器碗もみられた。

堀は底面が狭くなる薬研堀を呈し、幅約4m、深さ3mである。2基併走して検出されている。推定およそ90mの区画をもつと思われる。中世後期の所産である。

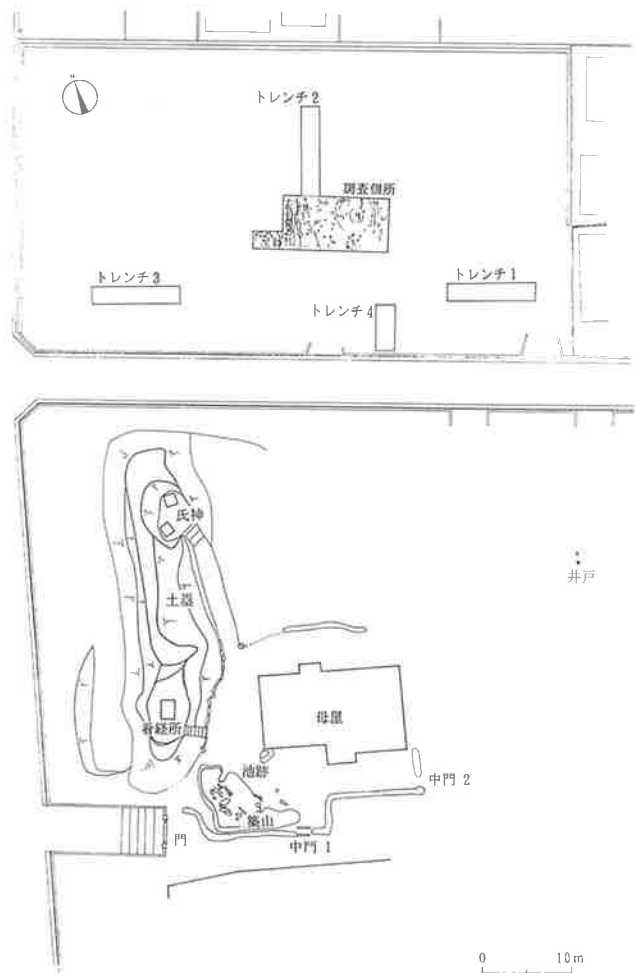


図2 留守家現況図



留守家堀跡

4 留守家屋敷跡

集合住宅建設工事に伴って、隼人町教育委員会による確認調査が平成13年3月5日～12日に、引き続き隼人町遺跡調査会によって本調査が平成13年3月21日～4月12日まで実施された。その結果、5ヵ所の調査区から古代～中世、近世・近代の多数の遺構・遺物が検出された。開発面積約2200㎡のうち、浄化槽設置場所の80㎡が本格調査された。

調査地点の南側には、留守家の母屋、およそ10×16mの建物が現存する。その西側には、南北方向に走る土塁状の高まりが残っている。その規模は、下底部幅約11m、高さ約2.8m、長さ約40mを測る。頂上部に、氏神・看経所などの祠がある。土塁の外側にあたる西側は若干凹んでおり、堀の痕跡を残す。昭和24年の屋敷の配置図によると、周囲は堀と竹林に囲まれており、約1町歩の面積を有すると記されている。堀は北西が屈曲しており、今回の調査で検出された堀がその一部と思われる。西に面する門を入ると、虎口状に屈曲し、中門が2ヵ所あった。一つは、イチノオモテに通ずるもので、ハレとケで使い分けていた可能性もある。現存する母屋には、イチノオモテという10畳の特別室がある。勅使が神宮参拝の折り、必ず立ち寄ったといわれ、他の部屋より床が25cm程高くなっている。段差をも



留守家土塁（南西より）

つ和室である。イチノオモテに面して南には、池があったといわれ、虎口の土塁を築山風に仕立てている。なお、留守氏の現在の墓地は、東南約200mの川を挟んだ対岸にある。

以上のことから、今回調査した場所は、留守家屋敷跡の中心からややはずれた北側の一角にあたる。

堀と思われるものは、底面の形態から箱堀と考えられる。検出部分で、6×4.6m、現地表からの深さは約3mを測り、南北方向に延びる。東壁のみ検出された。主軸方位はN-17°-Eで、現存する土塁とはほぼ同じであった。近世初頭頃に意図的に埋められ、畑等に利用されていたものと思われる。遺物としては、弥勒院跡・桑幡家屋敷跡に比すると、量的には少なかったが、やはり、各時代のものがあり、貿易陶磁器も目立つ。

5 まとめ

以上のように、両遺跡では遺構が密集し、古代～近世までのものが見つかっている。それぞれに堀状の溝が検出され、現存する土塁状の高まりとともに居館としての諸要素を備えていたことが判明した。中世には土塁と堀をめぐらし、庭園等を築き、船載品を入手していたことが看取される。今回は、両屋敷跡の一部を調査したにすぎないので、今後、さらに様々な角度から検討を加えることで、栄華を誇った鹿児島神宮とそれを支えた社家の歴史の一端を明らかにすることができよう。

えびの市の球磨陣跡（後編）

鶴嶋俊彦

4 球磨陣跡の構造

球磨陣跡の踏査は平成12年11月11日に実施した。陣跡は標高758.8メートルの三角点の置かれた緩やかな丘陵の頂上にある。現在、土塁のある陣跡部分と南～東側斜面が雑木林、北～北東斜面が檜林として利用されており、西～南西斜面は林が伐採されススキの草原となっている。高野高原の南端にあり、えびの盆地を一望することができ、周辺の林がなければ陣跡からは飯野城麓部分や加久藤城を眼下に見下ろしていたはずである。

土塁は保存が良好で、内径で70メートル前後の不整形円形を呈している。土塁は上面幅が4～5メートル、内側の高さ1.5～1.8メートル、外側の高さ2～4メートルである。土塁内部は土塁を構築する際に生じたと推定される幅約10メートル超の窪地が回るが、中央部は基盤岩の岩塊が散乱したままで特に丁寧な削平を伴っていない。南東側の土塁下には幅3.5メートル、深さ50センチメートル程度の浅い堀がみられるが、他の部分では確認できない。

さて、この土塁には北西、北東、南西の3箇所の部分に切れ目があり、土塁外方との通路となっている。北西と南東の切れ目には『城館跡調査報告書』で言うところの土手が取り付け、各々200メートルの長さで北東、南東に向け延びている（以下、北土手・南土手と略称する）。南土手の北から30メートルの地点では幅1.5メートルの切れ目がある。この土手の規模は下底部幅約2メートル、上面幅50～70センチメートル、高さ1.2～1.5メートルの小規模な土塁状の施設で、その内側（南東側と北東側）には土手を築くための土を掘り取っ

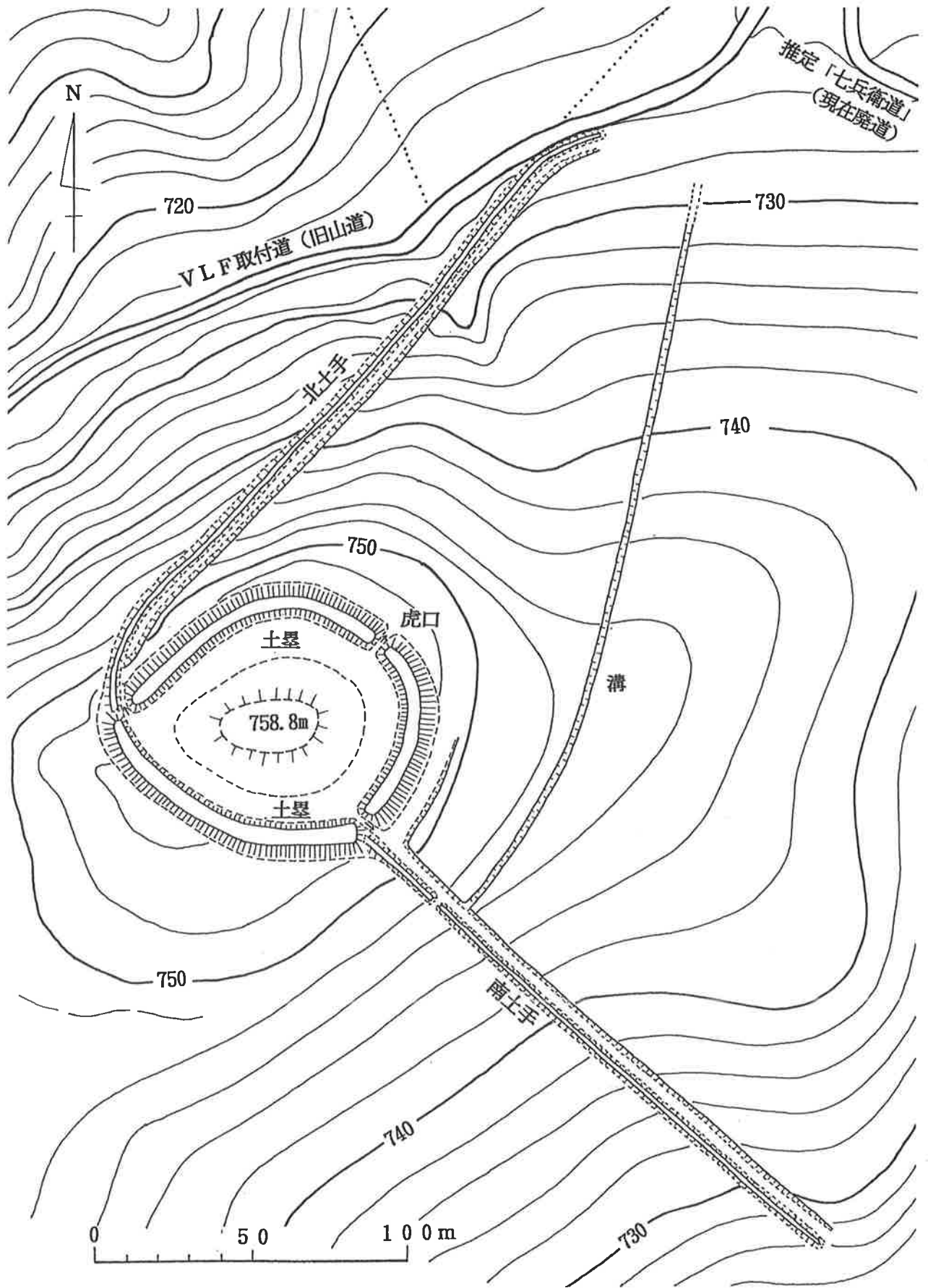
たために生じたと考えられる幅約2メートル、深さ50～70センチメートル程度の溝が付属する。土手の両斜面は垂直に近く、かなりの急角度で仕上げている。幅が小さいことからすると崩落の度合いが少ない印象を与える。北土手は現在V L Fへの取り付け道路によりその先端部の様子が不明だが、南土手は雑木林の緩やかな斜面の途中でブツリと終了しており、城郭用の施設とすればかなり奇異な構造である。また、今回、南土手の土塁南東切れ目から37メートルの地点で深さ50センチメートル、幅約1メートルの浅い溝が北東～北北東の走行で北方V L F取り付け道路まで直線状に延びていることを新たに確認した。これらの土手と溝は、小規模であることのほか、斜面途中で中断している等、縄張りの的にも理解しがたい施設で、城郭遺構としては疑問がある。

なお、北土手の外側のラインはえびの営林署の林班境界で標識が点々と設置されており、外側は上記のススキ野となっている。

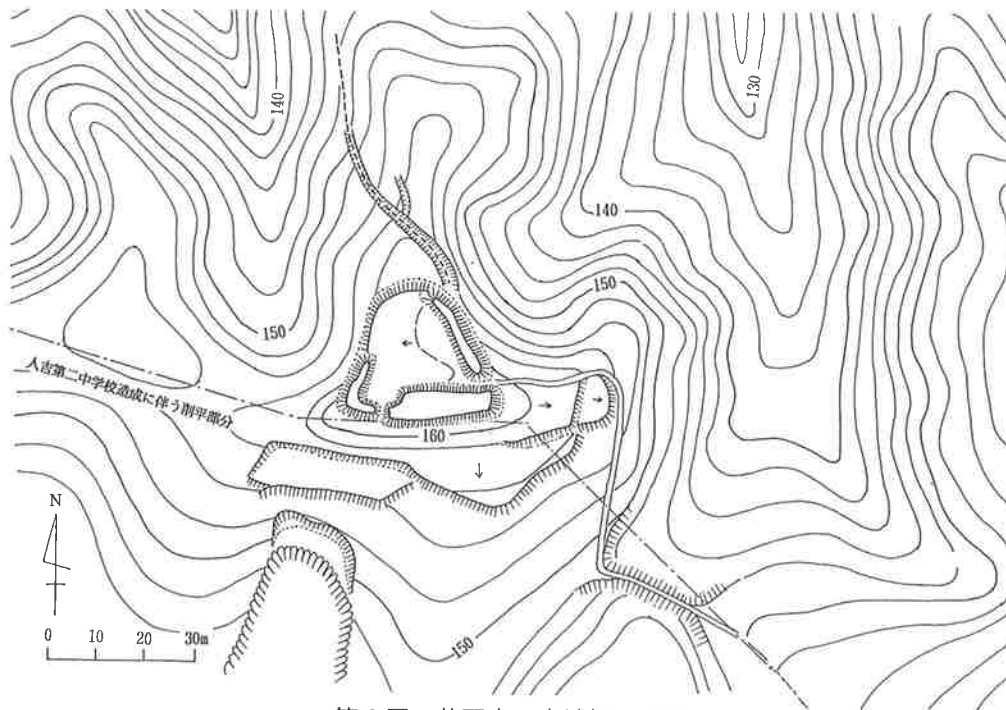
5 球磨陣跡の城郭遺構の検討

球磨陣跡の土塁は規模が大きく、その遺存状態が良好なため人の目にも触れていたようで、国土地理院5万分の1地形図にも表現されている。土塁に限った構造的な特徴から判断すると単郭式の陣城と考えられる城郭遺構である。問題は北土手と南土手が城郭遺構か否かである。それを解く鍵は薩摩陣比定地にある。

『城館跡調査報告書』による薩摩陣の比定地は標高795.9メートルの三角点のある丘陵頂上付近である。【史料1】の「飯野他領境并内場境麓廻繩引帳」による位置比定においても



第2図 球磨陣跡繩張り図 (鶴嶋俊彦作図)



第3図 井野木田古城縄張り図

この周辺の一部を「薩摩陣」と呼んでいたことが推定できる。遺構は丘陵東側の急斜面に沿って延びる長さ1,300メートルの土手が見られるのみで、その外には見るべき遺構は確認できない。この土手の構造は球磨陣跡の北土手・南土手と全く同一であり、同一の施工者が同一時期に構築した可能性がかなり高い。

さらにこれらの土手と同一構造の土手を2条新たに確認した。その場所は、薩摩陣比定地の丘陵と高野丘陵の境の地峡部となっている場所である。1条は薩摩陣比定地の位置する営林署所管国有林への門扉のある箇所、北-南の走行を持つ長さ60メートルの土手があり、南端は平地面でブツリと切れる。門扉は正しくこの土手の切れた箇所に設置されており、球磨陣跡の北土手と同様、この土手が国有林境界を示すものであることを教えてくれる。もう1条はここから西側に50メートルの地点から始まる土手である。この土手は林道で途中切られるが、30メートルの長さで北西-南東の方向で南東に走り、今度は南西に直角に曲がり130メートル走り、やはり緩やかな斜面上でブツリと切れている。

『城館跡調査報告書』では薩摩陣の土手を「国

営牧場を造る際に築かれたものとされる」と記すように、国営牧場の施設という伝承が伝わっている。国営牧場は高野原の営林署管轄の国有地に誘致創設された施設であるが、戦後は使用されなくなり、昭和25年にはその一部である高野の丘陵地が開拓用地に所管替えとなり（註7）、その他の牧場部分は再び営林署の林地となって存続した。

このように、薩摩陣の遺跡は未確定であるが、球磨陣跡や薩摩陣比定地に見られる土手に関しては国営牧場の自由放牧のための施設と考えるのが妥当であり、土手の崩落の度合いが少ない印象も、ほぼ半世紀前の構築物であることを示唆している。

以上から結論として、球磨陣は70メートル前後の内径をもつ不整円形プランの土塁によって防御された単郭式の陣城と考えられる。三箇所の土塁の切れ目のうち、北西と南東のそれは国営牧場の造営に伴う土手との位置関係が密接で、城郭遺構でない可能性が強い。残る北東の土塁の切れ目がこの陣城の虎口としての可能性をもつ遺構である。球磨陣の北東300メートルには【史料1】「飯野他領境井内場境麓廻縄引帳」に見える七兵衛道に比定で

きる古道（現在廃道、『郷土拾塵録』の「旧飯野越」、『えびの市史』上巻の「高野越」）が通過する。七兵衛道は元禄ごろ飯野と球磨領の田代を結んでいた道であり、中世に遡る道である可能性が強い。球磨陣はこうした交通路を抑える目的をもって築城されたと推定される。

6 おわりに

球磨陣跡や薩摩陣にみられる土手が城郭遺構であるか否かの疑問は、すでに『城館跡調査報告書』で提示されているところである。小論は相良氏の真幸支配への戦略を探るための一作業として、球磨陣の城郭遺構の確定を行なったものである。ただし、球磨陣が伝承どおりに相良氏によって築かれたという記録はない。戦国時代の後期、永禄年間に伊東氏と島津氏の攻防の挟間に真幸支配をうかがう相良氏の陣城として築かれた城であるとする、その構造が土塁に囲まれただけの単純なものであることに疑問をもつ。

球磨陣の城郭遺構は、長禄元年（1457）に橋本一封一族が籠城し相良長統によって攻められた「井野木田古城」（註8）に比定されている人吉市上林町字炭焼谷所在の砦跡に立地と構造が類似しており（註9）、15世紀中頃まで成立の城郭である可能性がある。

また、『犬童文書』（熊本県山江村犬童正春氏所蔵）の「文安五年以来連々致忠節候目安口文案」（註10）によれば、推定四箇条目に「嶋津忠國口取真幸之高野二於陣候之時、忠國被官／別符五郎口口楯籠薩州牛屎院内青木之城二候之処ヲ致夜詰、討捕上浦石見守・同子息候之時、被疵候之事、／高股射疵／」とあり、嶋津忠國が真幸の高野に城取し陣を置いたことが知られる（文意から口の欠字は城と推定）。

薩摩陣の遺構は今回の踏査では確認できなかったが、伝承にある薩摩陣は嶋津忠國の陣を伝えた可能性が考えられる。さらに伝承の信憑性を疑えば、球磨陣そのものが嶋津忠國築造の陣である可能性も否定できない。

以上、未だ陣の構造や史料などの十分な検証を終えているわけではない。同時代史料や分水嶺に置かれた「球磨陣」の位置についての検証、類似遺構との比較、人吉から真幸の間の歴史地理的な考察といった作業を踏まえることで、「球磨陣」の築造主や歴史的意義が明確になるものと考えている。これについては稿を改めて提示したいと考えている。

末尾ではあるが、小論の作成にあたって、えびの市教育委員会の中野和浩氏に地形図の提供を受けた。改めて謝辞を表したい。

註

- 7 前掲『郷土拾塵録』による。
- 8 「村山井野木田落城之事」『嗣誠独集覽』相良村誌資料編二 相良村 1995
- 9 赤瀬恵・椎葉文雄『村山遺跡調査報告書』人吉市教育委員会 1979。当報告書では村山遺跡の土塁遺跡として報告されている。土塁遺構は、村山台地の西端部、標高162メートルの丘の頂部にあり、北・西方の万江川沖積平野を見下ろす位置にある。平面形は隅丸三角形の内径20メートルの単郭式の城郭で、三方に土塁が回るが北西部は土塁を欠失し切岸となっている。東側と南側に土塁の切れ目があり、出入り口となっている。東側の出入り口は台地との隘路となっている馬の背状の細尾根を経て土塁遺構に達する通路と北側麓から登ってきた通路と連絡しており、東方を正面とした遺構配置となっている。土塁は南側土塁が上面幅6メートルで、東側と西側の土塁が上面幅2メートルで、高さ1.5～2メートルである。
- 『人吉市史』（人吉市1981）では、城跡の山下に俗称として「井野木田」があり、井野木田古城に比定している。
- 10 菖蒲和弘『山江村誌』歴史編（一）山江村1998。なお、同文書は熊本県立図書館編『文書にみる肥後の戦国展報告書』（熊本県立図書館1998）では「犬童重国忠状案」として紹介されている。

事務局だより

募 集！

◎機関誌『南九州城郭研究』第3号の原稿

論文、研究ノート、史料紹介等

出版物のご案内

機関誌『南九州城郭研究』第2号 — 好評発売中! —

購入希望の方は、下記手続きをお願いします。

・最寄りの郵便局において代金1,500円(非会員は1,800円)を「口座番号01760-3-84609, 南九州城郭談話会」までお払い込み下さい。確認次第、第2号を送付します。なお、送料は300円です。

・問合先

〒899-5421

鹿児島県始良郡始良町東餅田498番地
始良町歴史民俗資料館 気付
下 鶴 弘

TEL 0995-65-1553

FAX 0995-66-5820

事務局便り

◎機関誌『南九州城郭研究』第2号

A4版 104頁

・三木 靖「発刊に際して」 P 1

論 文

・鶴嶋俊彦「中世八代の城郭と城下」 P 3

・高田 徹「泗川倭城について」 P 39

研究ノート

・若山浩章「都於郡城覚書」 P 51

・川元茂信「南郷城と桑波田氏」 P 61

・上田 耕「南九州の拠点城郭の一例」 P 73

史料紹介

・五味克夫「菱刈本城城主考(補正)」 P 85

・三木 靖「中世城郭と住民」 P 89

編集後記

◆本会も、ついに5周年を迎えることができました。会報もその間に17号となり、年に3~4回のペースで出ていることとなります。これも会員の皆様方の御協力の賜と感謝申し上げます。引き続きの御支援・御協力をお願い致します。

◆今号には、鶴嶋俊彦氏の「えびの市の球磨陣跡」の後編を掲載しました。氏は本誌の常連で、氏の協力なしには、ここまで継続できなかったことでしょう。心から感謝申し上げます。

◆鹿児島神宮周辺の中世居館の調査は、南九州でも、全国的な居館構造の中で考えていかなければならないことを物語っています。居館の調査は、やっとな鹿児島でも始まったばかりです。いろいろと皆様方の御教示を頂ければ幸いです。

【新入会員】

(5月20日現在)

堀口 隆之

第17回 見学会・例会, 総会 案内

— 5周年記念大会 —

日 時 平成13年5月26・27日(土・日)
5月26日 10:00~17:00
5月27日 9:00~15:00

集合場所 26日鹿児島県歴史資料センター
27日西鹿児島駅前広場

交通案内 ・鹿児島県歴史資料センター黎明館
市営バス, 市電朝日通り電停より
徒歩約10分

会 順

(1) 総会・研究発表会
26日 10:00 総 会

(2) 講演会
10:30 講演会
三木 靖
「南九州の城郭成立期の様相」

(3) 研究発表会
13:00~17:00
高梨 修
「琉球弧地域におけるグスクの一様相」
若山浩章, 堂込秀人, 東 正和, 稲丸雅
文 他
熊本, 宮崎, 鹿児島他調査速報
18:00 情報交換会(敬天閣)

(4) 見学会
27日 9:00 西鹿児島駅前広場
川上城跡→催馬楽城跡→清水城跡→
東福寺城跡→内城跡→上山城跡
15:00 解 散

南九州の城郭 第17号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕気付
南九州城郭談話会
(振替口座 02040-6-7850)

発行者 三 木 靖

編集者 重 久 淳 一

印刷所 (株) ト ラ イ 社

入会金500円 年会費2,000円